

特 114

84

詩集
光と響の交響楽

岡田春潮 著



始



特 114

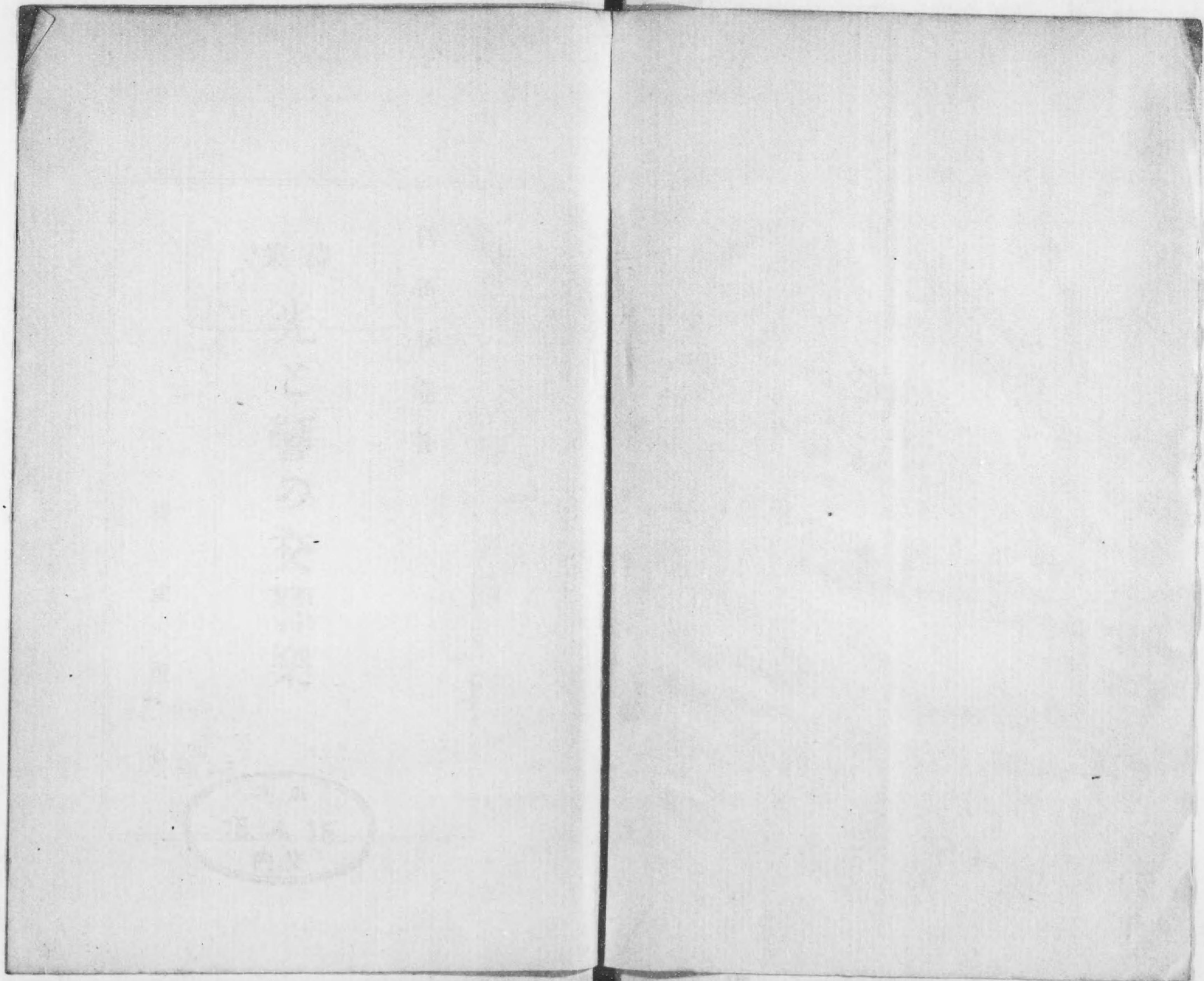
84

詩 集

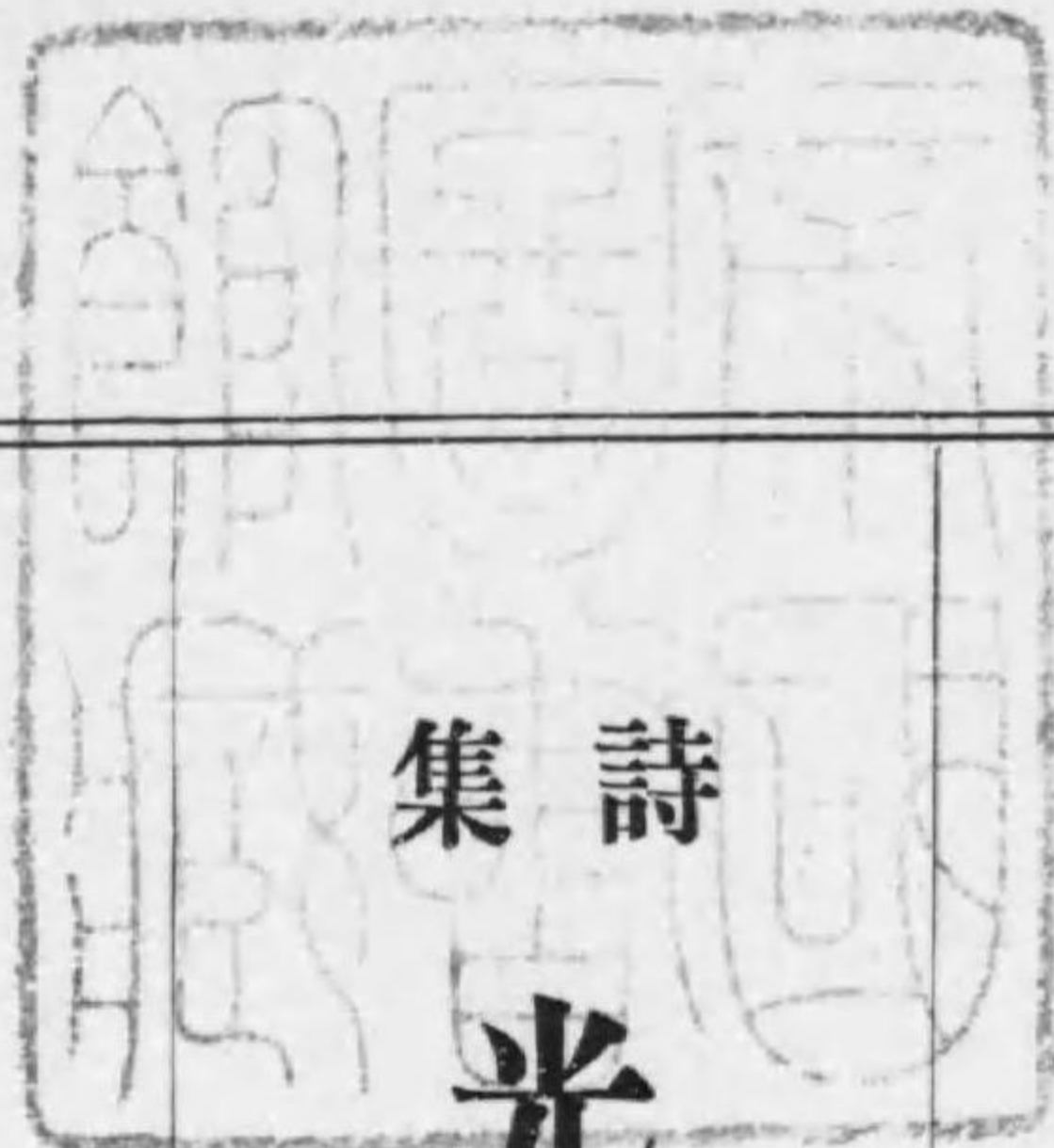
光と響の交響樂



岡田春潮 著



特114
84



岡田春潮著

詩集

光と響の交響樂

青蘆社版

大正
15. 4. 15
内交

目次

序詩——私の詩……………	一
春を迎ふる歌……………	五
處女禮讚……………	七
眠り……………	一〇
樂音……………	二
蝙蝠（一）……………	五

東 都	一八
瀬戸内海の歌	〇
紫の天鵝絨の夜	三一
時は過ぎゆく	三五
都の雨	三七
梅 花	三九
死	四二
星	四五
蝙蝠 (二)	四八
渚	五一

秋の雨	五三
星 夜	五四
夜の思ひ	五九
春の訪れ	六三
軍 港	六七
炭 坑	七一
思ひ出の本溪湖	七四
女 工	七八

火星を迎ふ……………	八一
爾靈山頂に立ちて……………	八四
戦争短詩四篇……………	八七
平 和……………	九〇
空中の征服……………	九二
潜航艇……………	九五
石炭の歌へる……………	九八
石 油……………	〇一
坑夫 漁夫……………	一〇四

序 詩

私 の 詩

頭の中から絞り出したのではない。
 氣まぐれな微風が何處からこもなく吹いて
 櫻の花が思ひ出したやうに散ることく
 声の葉が眼覺めたやうに揺れるごとく
 水がその面に時ならぬ微笑を浮べることく
 捉へ難いインスピレーションから私の詩は生れたのだ。

鐵砧かたじの上で鍛へあげたのではない。

速力と擾乱との工場の片隅で

焼けつくモーターの咆吼から

嘯み合ふ機械の火花から

灼熱せる熔爐の沸騰から

抑へ難い聲となつて私の詩は生れたのだ。

I

春を迎ふる歌

春は来ぬ

めでたき光。

あらゆる木の花草の花

輝やくばかり粧をこらしぬ。

空ゆく雲のうるはしさよ、

野をわたる風のかんばしさよ、

ああ

われいかなる粧をこらして汝を迎へむ。

春は来ぬ

たのしき世のさま

鶯は花さく木かげにうたひ

雲雀は草もゆる野によばふ。

ふりそぐ小雨のやはらかさよ。

ながるゝ水ののどけさよ。

ああ

われいかなる歌を調べもて汝を迎へむ。

處女禮讚

誰ぞその秘密の殿堂を開き得ん

聖なる處女

その壁籬のなか

汚れなき情熱の輝やく焔は

黄金の火盞（くわん）の中に音もなく燃えつゝ

妙なる光を放つめり。

誰ぞその秘密の殿堂を開き得ん

聖なる處女。

その壁龕のなか

眞珠色に曇る奇しき夢は

眠らぬ眠りのなかにまどろみつゝ

まだ見ぬ青春の來るを待てり。

誰ぞその秘密の殿堂を開き得ん

聖なる處女。

その壁龕のなか

微笑む愛は五月の薔薇の花の如く

綻びむとする蕾の柔らかなる花辨はなびらの中に
その純潔なる香氣を醸せり。

誰ぞその秘密の殿堂を開き得ん

聖なる處女。

その壁龕のなか

美はしき眞珠は日に日に成長しつゝ

太陽の光を怖るゝ夏の夜明の稻妻の如く

神秘の中に耀やけり。

眠り

烏羽玉の夜ともなれば、眠りは
遙かなる森蔭の仙郷より立ちいで、
静かなる、いと静かなる夜の闇に
足音も立てずひそやかにわが傍に忍びよる。

夜毎夜毎 汝はわが獨り寢の闇に忍び入りて
われを遙かなる森蔭の仙郷に誘ひゆく。
かくて曉の露けき風が森の木の葉を揺がすまで

わが夢は柔らかなる汝の胸毛につままれて安らかなり。

あまきものうき夜は來ぬ。やがて
眠りは影の如くわが寢床に滑り來りて
恒久の乙女の如きあまき接吻をわれに與へん。

おゝ眠りは今、わが眼の前にちらつく、
あまく、ものうく、けだるき瞬間。
——静かに——われを抱擁し終んぬ。

樂音

わが胸の上に春雨の如くしとしとふりそゞぐ
かつ近み、かつ遠み、絶えてはひゞく樂音よ、
或は戀になやめる乙女のすゞりなきのごとく、
或はようこびの宴うたげの花やかなるとよめきのごとし。
或時はわれを遙けき幽寂の森に迷はしめ
或時はわれを崇厳なる神の息吹にふれしむ。
汝は何處より來るや、おゝ不思議なるものよ、
汝は見る能はず、觸るゝ能はず、香もなく、色もなし、

されどわれに限りなき歡樂くわんらくと慰安ゐんあんをあたへ
われをして聖なる法悦境に遊ばしむ。
おゝ汝天使よ！

絶えずもひゞく樂音はわが胸をゆする、
あやしくも、いとしくもわが胸を揺する、
わが血忽ちにして沸き、且つ躍り狂ひ、
わが血忽ちにして冷え、かつ氷の如くに凍る。
わが胸は汝の音と共に深く息づき
わが心は汝の調べと共にさまよひ出づ。

汝は何處より來るや、お、不可思議なるものよ、
われを誘ひていづこにゆくや、怪しき誘惑者よ、
追へど拂へど汝はなほも忍びより
わが胸深く喰ひ入りて魂を奪ふ。
お、汝惡魔よ！

蝙蝠 (一)

夕燒の色蒼さめたる空に消へゆき
星の光いまだまた、かす
暗き冷たきかたはれ時に慌しう
蝙蝠はその魔の如き翼を夕風に翻へす。

人住まぬ森の中の破屋やぶらの天井より、
水なき野の末の古井戸の底より、
烏啼かぬ奥山の朽木の空洞くつちより、

壊れたる廢寺の煤けたる壁より、

夕べともなれば汝は舞ひ出づ、

あるかなさかの薄光をしたひて、

その魔の如き翼を翻へし

さてもあやしき舞を汝はしも舞ふや？

『われは恐ろしき呪に嘆く身なり、

わが舞は堪へ難き苦惱の舞なり、

わが眼は美はしき太陽の光にえ堪えず、

かくてとこしへ無明の闇に悲しき宿業をかこつなり、

『われ等は幾百萬年の昔祖先が犯せし

罪のいましめ未だ解けず、

鳥に似て歌ふ能はず、獸に似て走る能はず、

薄明の空に今もなほさまよふなり。』

京 都

桃色と黄金の夢は今もなほありや

鴨川ほとりに眠る永遠の都よ。

山は昔ながらに青く水は昔ながらに清し。

花も月も昔のまゝに匂ひ、かどやく。

されど美はしき夢の國を辿りし

なつかしき物語の中の

彼の人々は今いづこにありや

われに語れ、汝、遊惰の都よ。

おゝ静かなる夢の都よ。

紫と茜の都よ。

詩と美はしき女の都よ。

鼓と笛と琴の都よ。

ゆく春のゆふべ、うつくしき京の女の

破れし鼓をいだいて欄干に凭りつゝ

すぎし日の思ひ出に泣く

おゝあまき憂鬱の都よ！

瀬戸内海の歌

夏の日の来る度に私の心はあこがれる瀬戸内の海よ。

お前の青玉のやうな水は今も廣々とたゞへられてゐるか
輝やく太陽のもとに、お前の美しい島々は

今も鮮やかな緑の肌を浸してゐるか？

おゝ真珠の如き海よ、私はお前を思ひ出す、

お前の魅力ある明るさと、晴々とした微笑を。

また彼の飛沫しぶたに濡れたことよしき懸崖を。

さしひく潮の音を。群れ遊ぶ海鳥の聲を。

美しくきらめく水は遙かなる海から海へとつながり
翠滴る山々は遙かなる陸から陸を呼んでゐる。

幾千の島々は澄み切つた鏡の上に手をつないで舞ひ
岸を洗ふ白波は絶えず新らしい花環を編んでゐる。

平和な海よ、恵多き島々よ、私のあこがれは

何時もお前の廣い胸のほそりに飛んでゆく。

私の若い二つの時代をはぐくんでくれた

お前をさうして忘れやう、おゝ永久の戀人よ！

鵬眠々 吳 海よ、私はお前を忘れることは出来ない、

いかにお前の水は深く、青かつたことよ！

揚桃の花さく鍋の丘にあがつて

詩を思つた若き日よ、それは夢のやうに美しかつた。

音戸の瀬戸に櫻の花が散る時、鍋の山には郷國が燃える

丘の上の百姓の背戸には桃の花が咲く。

春を歌ふ雲雀の楽しい歌聲が

段々畑の菜の花のなかに落ちる。

おゝ五月！ 蒸せかへる新緑の頃に

海こえ、山こえ、過ぎゆくあらしよ、

アカシヤの花かほる林のなかに

風にひるがへる若葉のきらめき。

六月の風がさやさやと麥の穂末を渡るさき

野の果に見る海の色鮮やかさ

また八月の微風が空の牧場に羊の群を追ふ時

紺碧の海に湧きかへる波の泡吹き。

美しくしき多島海よ、勝れたる浦々よ。

輝やくお前の魅力を私は忘れることは出来ない。

静かにあがる藍青の水波、その青白き黎明、

また紫紺に暮れゆくゆふべ、月光の碎ける夜。

颯々^{まは}と叫ぶ疾風に雲低く亂れ飛んで

夕立の雨脚が泡立、海の上を渡つてゆくと、

あこより晴れる夕空に、壯大な虹が

遙かなる島から島に、七彩の橋を架け渡す。

勇ましい水夫等は帆にいつばいの風を孕ませて
舟唄高く、楽しい航路をゆく。

乙女等はその豊かなる黒髪を入潮に洗ふて
夕暮の濱に、戀人の歸りを待つ。

朝潮満つる沖邊に櫻鯛の群が躍るとき、
夕潮騒ぐ夜の濱に鯉の網の重たきとき、
また静かなる入江に舟を泛べて垂れる日の

漁夫等の喜びを、私はよく知つてゐる。

お十月！ 澄み切つた青空と紫紺の海、
そして薔薇色に匂ふ夕燒のわけて美しい月。
立ちこめた料霧のほのぼのさあけゆくあした、
繪のやうな松原に白銀の月ののぼる宵。

海を越えてくる秋風に無花果はうれ
事もなき島々には密柑が色づく。
曉の夢を破る千鳥の聲、

磯にこぼれる松の葉にも秋が知られる。

やがて十一月ともなれば、佐保姫の校は
瀬戸内あたり錦に埋める。
潮にぬれた、名もなき沖の小島までが
その美しい鳥影に紅を流す。

お、小豆島の峯よ、嚴島の谿よ、
私はあの眼覚むるやうな美しさを忘れることは出来ない
あの晴々した頂きから眺めた満山の黄葉！

あの清らかな水に映つた血のやうなもみぢ!

花ももみぢも散りはてし、内海の波が
冷たい潮風にひるがへる頃にもなると
時折輝やく白妙の花が一夜のうちに
陸の上の一切のものを埋めてしまふ。

お、夏の日の今こそ私は思ひ出す

あの清く美しい瀬戸内の雪景色を!

波はあくまで黒く青く

島は晴々、薄化粧を濃らして浮ぶ。

かくて瀬戸内の海は今も變ることなく
永久の若々しさもて微笑んでゐるだらう。
年は移り月は變るとも、紺碧にきらめく
お前の美しい面に皺の寄ることはあるまい。

お、吹け、夏の風、湧け、雲の峯よ、
そして私の夢をのせて行つてくれ!
輝やく太陽のももに、潮は遠鳴り、

緑の島が肌を浸す、あの美しい海のほとりへ！

(大正十三年七月)

紫の天鵝絨の夜

紫の天鵝絨の夜

大理石敷きし都大路を

燦爛たる燈火を浴びつゝ

豪奢極めし都人のそとろ歩きや。

風にゆするゝ行路橋に緑の玉は滴り

白き舗石に杳は鳴る

紫の光きらめくシヨウウ井ンドウに

美はしき女の姿、かつ映り、かつ消えゆく。

孔雀の如き春の衣を脱ぎすてて
白鳥の如く清く装ひたる女等は
裳も輕けに足早に過ぎゆく
新らしき浴衣の紺のにはひよ。

天鷲絨の靄の中より浮びいづる
水々しき女の夏姿。
長き洗髪を振りさばきて

凄くほ、えむ美人。

紅き唇、黒き瞳 黄金の髪飾
指に、帯に、輝やく白金とダイヤモンド、
香水の匂ひ、髪の匂ひ 若き女の肌の匂ひ、
美しきながしめ、光り色々の交響樂。

人々は涼風を逐ひてあてどなくさまよふ
大理石敷きし都大路
燦爛たる燈火はゆらぐ

紫の天鵝絨の夜。

時は過ぎゆく

時は過ぎゆく

黄金の羽ばたき

壁にうするゝ八つ手の影

白百合の花、かつなけき、かつなげく。

時は過ぎゆく

黄金の加足音、

わが心臓の上に、

菴容は、かつなげき、かつなげく。

都の雨

ほそぼそと降る

秋の朝の雨、

冷たくも肌をさす

云ひしれぬわびしさ。

灰色にけふる

さびしき都大路、

ぬれをぼつ塵米は

しめやかに吐息す。

たえずも降る。銀の雨、

静かなるさざめきよ、

凋落の秋のちまたは

悲しき音にさびれけり。

梅 花

松籟絶えし谷川のほこり

静かに流るゝ水の音さえて

鶯の歌のかすかに聞ゆるまごころ

くしきかほり立ちこめて梅の花は咲きつゞく。

さびはてし老樹の

さしかはすくろがねの枝に

つけたるは白きやさしき花、

云ひ知れぬそのけだかさ。

雪をしのぎ氷を翻き、

み山の奥の冬の日、

やがて来まさん春の女神の

冠の花を汝は纏るや。

月おぼろなる三月のゆふべ

漂ひ来る妙へなるかほりに

美はしき人を訪ねてさまよひいづれば

花のもこ、われ高士にめぐりあひぬ。

牡丹の艶なるも求めじ、

薔薇の優なるも願はじ、

青磁の瓶に盛られたる白梅の花よ

われはその洋東的なる姿を愛するなり。

死

何處から彼はやつて来るか、それは誰も知らない謎だ。
墓場の空からか、火葬場の竈の中からか
深山の沼のほとりからか、大海の千尋の底からか、
但しは天國からか、地獄からか、
それは誰も知らない大きな謎だ。
でも彼は来る、来る、何時も来る。

何處から彼はやつて来るか、それは誰も知らない謎だ。

眞晝の森の奥からか、丑滿時の野の末からか、
大空を渡る嵐の中からか、燃えあがる火の中からか、
それとも劔のきつさきからか、毒藥の壺からか、
それは誰も知らない大きな謎だ。
でも彼は来る、来る、何時も来る。

何時彼がやつて来るか、それは誰も知らない謎だ。
婚姻の宴の席にでも、勝利の刹那にも、
みぎり兒の微笑のさ中にも、老人のいこひの時にも、
また勇ましく働く時にも、安らかに眠れるひまにも、

それは誰も知らない大きな謎だ。

でも彼は来る、来る、何時も来る。

何時彼がやつて来るか、それは誰も知らない謎だ。

榮ある旅の首途にも、長き航路の終りにも、

大いなる業のさ中にも、遷けられたる戀の法悦の時にも、

また希望の晨にも、苦痛の夕べにも、

それは誰も知らない大きな謎だ。

でも彼は来る、来る、何時も来る。

星

ものみな眠る暮夜なか

たどひこり窓を開いて

大空に輝く星くすの

沈黙の歌をきく。

深く澄める闇黒の空に

きらめく千萬の星！

過ぎゆく時の流れに

音もなく流れゆくか？

地の上のすべての人は眠つて

私ひそりがめざめてゐる！

神祕なる星の歌を

私ひそりがきいてゐる！

私の心はゆえもなく

涯しなき大空に飛んでゆく。

まだ見ぬ宇宙の涯から

星は私を導いてくれる。

すべてのものゝ眠つてゐる地上に

私はひそりの知己をも求めない。

空の彼方の星くすよ

私はお前だけで満足だ！

ここに私の存在がある、

そして私は祝福されてゐる！

蝙蝠 (二)

雀や百舌雀のかしましき聲も聞かず、

雲雀や鶯の楽しさうな歌も聞かず、

忙しげに飛びかゝる燕の姿も見ず。

誇らしげに大空をかける鶯の羽音も聞かない。

また憂鬱の森に詭しげに啼く鳥の聲も

私の世界にはまだ聞えては来ない。

輝やく太陽と、烏羽玉の闇との交錯する

匂はしき黄昏の寂光のなかに私の世界がある。

貧しきものをして毎日のたつきを追はしめよ、

恵まれたるものをして楽しき歌を歌はしめよ、

誇れるものをして彼等の高き空を飛ばしめよ、

痛めるものをして彼等の悲しみを嘆かしめよ。

たゞ私は私の世界を何時までも楽しもう、

そして私の夢を永久に失ふまい。

願はくは大空を與へられたる獸身のわれをして

夕暮のひとときを自由に羽ばたかしめよ！

渚

寄せてはかへす

波の音。

波は白い指をあげて

渚に

永遠の譜をかなでゝゐる。

寄せてはかへす

波の音。

秋の雨

秋の雨、

洋館のこはれたる石だよみの上を
さびしくたよく。

秋の雨、

戀に破れしわが傷める心の上を
さびしくたよく。

星 夜

おゝうれし今宵また

静かなる丑滿時にわれひとり

きらめく星のかすかすを仰ぎつゝ

夜よ、いましの聖衣の中に。

悠久の時は音もなく流れつゝ

太虚は深くも黙せり。

嚴かなる闇の蒼宵に

かつ瞬く千萬の星

底ひなき大空の海に

沈める眞珠の光

神秘なる森の木がくれ

こほれ落つ葉末の露。

永遠の神の玉座に

讃歌は恒に絶えず、

曉の聖き光は

新らしき世界を創る。

永劫の闇と光の

戦ひはかつて止まず、

かしこには時恒に初まり

かしこには時恒に終る。

創造の埒場の沸騰は

とこしへに停まず、

そこに生誕の歡びの聲あり、

そこに滅亡の悲しき叫びあり。

天の川長々横はりて

星はひとしく息づきぬ。

わが心ごきもに澄みゆく

お、美はしき星空よ！

星座は移りぬ夜は更けぬ、

耳澄ませどもまた聲なし。

星ひとつするするさすべり落ちて

夜、空はてもなく――！。

夜の思ひ

烏羽玉の夜の空に輝く星々を仰ぎて

今宵われまたものを思ふ。

今日も、昨日も、一年の前も、百年の昔も、星は同じ軌

道にあれど、

人の世は常に同じからず。

げに人の世は常に同じからず、

諸々の人の命や、傲れる王や、成ゆる國や、

さては地上の一切の美、
それ等は汝の一瞬のみ。

あゝ星よ、汝の美はとこしへなり、
われ等はかなき運命を負へる地上の子等
永生の汝が美しき光を羨みつゝ、
空しき聲にて呼ぶ『神よ！』と。

全能の大神、何處にありや、
たゞ頼むわが力―そも何時までの生命ぞ。

わが魂は大空の涯までも翔けりゆのかんも
あはれ、うつせみの身ぞ泥土にまらはるる。

おゝカシオペヤよ、オリオンよ、北斗七星よ、
われ何時の日か汝を再びめぐり得べき
時かへらず、生命短し、この塵の身の
空しく塵にかへらば、わが恨ぞ盡きじ。

星またたき、露しけし、更けゆく夜に
たゞひとりたゞすむ、わが思ひ悲し。

耳をばだて、聞き入れば
大空を渡る風の聲のみ。

春の訪れ

遠い野のあなたから春がやつて来ました。
そよふく風に乗つてやつて来ました。
春は枯れた廣野に緑の草をよびさまし
菜の花だいばなと紫雲英むらさきうんげいの花を綻ばせました。
また凍えた土の床の雲雀の巢に訪れて
その翼と歌とを大空に放ちました。
百姓等は暖かい光に感謝しつゝ、
彼等の歌をまつて畑の仕事にとり掛りました。

遠い山のあなたから春はやつて来ました。

暖かい風に乗つてやつて来ました。

春はもつれた柳の糸に緑の芽をよびさまし

梅の花と桃の花とを綻ばせました。

また凍えた谷間に鶯の戸をたゞいて

その楽しい歌を木の枝から枝へと放ちました。

木樵等は永い冬の眠りからさめて

彼等の斧をこつて蘇つた山へと立ちいでました。

軍

港

朝まだき煙立ちこむる軍港の奥深く
群がる軍艦は聲をひそめて横はれり、
薄曇色にあけゆく山の麓
模糊たる中にうめくは何の聲ぞ。

晴れゆく霧の中よりあらはるゝ
鐵の虹と、並み立つ大工場の棟、
雲を吐く煙突の林、

聳え立つ大起重機の手。

港の奥深く波立たぬ淺瀬に、

或は長く黒き鯨の腹のほとりに、

翼休めて眠る白き鷗の群、

それ等は潜航艇なり。

日は出でぬ、山の如き巨大なる軍艦に

きらめく眞鍮の金具、ゆらめく水の反射、

立ち並ぶ櫓は林の如く

群がる艦は舷々相摩し、港を歴して横はる。

静かに、壮大なる朝の軍港に

唳啗たる喇叭のひびき艦ごとにおこりて

色鮮かなる軍艦旗

麗かなる曙光のうちにのぼりぬ。

艦載水雷艇は忙しく港内を馳けめぐり

色さまざまの信號旗、朝風に翻へる。

立ちのぼる黒煙、吐き出す蒸氣、

眼覚ましき軍港の活動は今や初まれり。

炭 坑

地下一千尺、常闇の世界に

地上の人の識らざる一社会は存在す、
色なく、光なく、あらゆる地上の歡樂・榮華をよそに
そこにはたゞ勞働と苦痛とあるのみ。

狭く、暗く、濕りたる坑道の奥より
轟き來るダイナマイトの音と炭車のひどき、
鼻を突く、臭と息苦しき空氣、

夜もなく、晝もなく、人はたゞ暗く冷たく働く。

爆發瓦斯こもる坑の奥

たゞ一点の黄色き安全燈を頼りに

錫嘴の音と炭の崩るゝ音とを聞きつゝ、

炭塵に汚れて觸く裸体の男女の黒き唄よ！

重々しき岩の床は常に彼等の頭上に覗へり、

絶えず湧き出づる水は坑道に溢るゝを待てり。

恐るべき瓦斯は彼等の周圍に充つ、

同じ運命の道は彼等の上にも、また下にもあり。

暗き坑の底に、彼等は營々こして働く、

思ふことなく、祈ることなく、昨日もなく、明日もなく。

おゝ地上に輝やく燦爛たる文明よ、

汝は如何なる光をこの社會に投ぜんとはする？

思ひ出の本溪湖

74

すばらしい本溪湖の町を君は見たか？

赤緒けた山々の谷あひに建てられた小さな町、

でもそこには創造の増場がある、

科学と自然、文明と未開とが何時も戦争をしてゐる、

そこには煤煙と炭酸瓦斯とが晝も太陽を蓋ひ、

星の如き不滅の火が夜も晝のやうに輝いてゐる。

灼熱した熔鑛爐は不絶の烽火をあげ

雷の如き機械の響は人間の凱歌を歌つてゐる。

焼くが如き大陸の夏の暑い眞晝にも

このすさまじい戦場の活動は決して止まない。

熱鐵を孕んだ砂からは水蒸氣が渦を巻いて立ち昇る、

焼けた機械は嘯み合ひ、きしり合つて火花を飛び散らす、

吹雪吹きまく満洲の凍える冬の夜にも

この谷あひには熱と焔とが嵐を起してゐる。

流れ出す鑛滓は光の瀾のやうに太子河に落ちる、

75

灼熱した鉄の湯は雪に蓋はれた兜山に反映する。

すばらしい本溪湖よ！　そこでは

火の出るやうな労働が絶えず狂ひ廻つてゐる。

焔と煙と塵埃の渦巻きの中に

汗と油に塗れた人間の黒き唄がある。

でも夜、――美しい夜が来ると、幾千の電燈が

花のやうに本溪湖川の水に流れる。

そして賑やかな三味線と胡弓の音もがもつれ合ひ

二上りの唄が芙蓉花の歌と一緒に流れる。

おゝ本溪湖！　不思議な町、すばらしい町よ！

お前は寂しい満洲の山の中にダイヤモンドのやうに光つてゐる。

其處を通る旅人の誰もが一度見て決して忘れないやうに
お前の魅力は今も尙私の思ひ出を楽しいものにする。

女 工

汽笛が鳴れば女工等は急ぐ

機械場のおのが持場へ。

艶やかに光つた高島田や桃割れ

粹な新蝶々も流れてゆく。

紙の花簪や手柄や櫛や

綺麗に飾られた安つほい小間物、

白い作業衣で包んだ後姿に

はつミ眼立つ派手なモスの帯。

機械が調子よく廻れば女工等は唄ふ、

浮氣な戀や、楽しい憧憬、

みじめな寄宿舎生活や、はかない身の上、

故郷偲ぶ幼き日の夢。

調帯は舞ひ、齒車は調子を合はす、

工場の塵は光線に照らされて踊る。

女工等は苦しみも不平も忘れて無心に唄ふ、

若い男工等はまぜかへす。

午後五時の汽笛が鳴る——嬉しい解放！

奥様達は夕化粧の鏡に對む

令嬢達は黄昏の公園に歩を運ぶ時

疲れた鳩等は金網の中の塒に急ぐのだ。

火星を迎ふ

お、汝戦争の星、

お、汝軍神の星、

お、汝熱情の星、

お、汝大才の星、

火星は近づく

四百年來の天空の珍客、

火星は近づく、

懐かしきわが地球の兄弟。

八月の大空に瞬く群星の中に

爛々として輝やく巨大なる火球。

澄み渡る紫紺の夜の空に

汝は燃えあがる情熱に息づけり。

天文學者等は巨砲の如き望遠鏡を均しく汝に注ぎ

遠來の珍客の雄姿を仰ぐ。

無電技師は三千萬哩外の虚空に電波を驅り

懐かしき未知の友に挨拶を送る。

仰げ、今火星は東の空に堂々たる戦車を驅り來る、

今宵こそ彼、わが地球に最も近づく日。

二十世紀の科學は我等が疑問の幾許を解決するや？

おい謎の星よ、われ汝を歓迎す！

(大正十三年八月二十三日)

爾靈山頂に立ちて

突兀二百三メートル、あゝ爾靈山よ、

爾の青春は戦なりき。

光榮ある回顧は爾、頭上に輝く、

あゝ鉄と血と火との壯烈なりし彼の日よ。

鐵彈 硝煙と碧血とに塗れたる土よ、

爾は今もなほ白熱の青春の日を夢みるや。

いかなる霹靂の日、鐵は鐵と、火は火と、
肉は肉と相撃ちて渦巻きしぞ。

赤き喇叭の乱調の中に幾萬の若きますら男は
光榮の死に向つて勇ましく進軍せしぞ。

爾は鐵火と肉とに埋められ傷けられて
また昔日の姿を見ず。

されき光輝ある歴史は千載に輝く、

堅忍不拔の勇士の靈と共に、爾の名は永久に消えじ。

見よ、今もなほ鮮血に染む壯烈の面影、

爾靈山頭眞紅に燃ゆる落日の光り。

戦争短詩四篇

機關砲

クラ、クラ、クラ、クラ、クラ……

機関砲は呻き出した。

氣味の悪い骸骨の舞踏が始まつた。

空の怪物

幾台かの飛行機が空の一角に現はれた。

砲兵は俄かに薬で砲を隠し騎兵は森に逃げこんだ。

飛行機は高い空から地上に恐怖の種を蒔いて行つた。

突 撃

重い不自由な身体を勵ましながら私は只管突進した。

さ、死が私を不自由な身体から解放してくれた。

私はあらゆる障害物を易々と越えて突進することが出来た。

休戦喇叭

廣い戦場に休戦喇叭が鳴りひびいた。

敵も味方も暫らくは自分の耳を疑つた。

やがて死のやうな沈黙の底から大きな歡呼の聲が湧いて来た。

平 和

戰塵漲る野の彼方より

『平和』の鳩は飛び來れり。

喇叭の響、祝砲の音、歡呼の聲、

鐘の音、喝采の響、歡呼の聲、

平和は來れり！ 平和は來れり！

あゝ平和！ そは來れり。

國を失ひ、家を失ひ、父と母を失ひし

憐れなる白耳義の子等は狂喜せり。

良人を失ひし佛蘭西の寡婦、

子を失ひし英吉利の家婦、

彼女等は相抱いてたゞ泣けり。

幾百哩に亘る戦線に立ちて

敵も味方も歡呼せり。

沙漠となりし戦場の夜に

幾百萬の死靈は踊り舞へり。

平和、平和、あゝそは來れり！

空中の征服

久しくも「人類」は眠りつゝありし。

限られたる大地の草の上に。

獸類は彼の周圍をかけり

鳥類は彼の頭上を飛びかひつゝ、彼を嘲笑せり。

「嗤ふべき彼れ人類よ、劣等なる動物よ！」

獸類は叫びぬ。

「疾驅、跳躍、徒歩、すべて彼れ、われに及ばず。」

「憐れむべき汝等地上のものよ！」

高く天空に輪を畫きつゝ、飛翔せる鳥類は呟きぬ。

「汝等のうちよく我の如く飛行し得るものありや？」

久しくも眠りつゝありし「人類」は終に甦立ちぬ。

大なる抱負と意氣をもて。

獸類はその無謀を嗤ひ、

鳥類はその愚を嘲りぬ。

されど終に「人類」が空中を征服せし光榮と勝利の日は
來れり。

如何なる空中の生物よりも遙かに偉大なる人類の翼は
凱歌を奏しつゝ天空高く飛翔しぬ。

驚愕せる鳥類は叫びぬ。「あゝわれ終に彼に及ばず！」

潜航艇

來れ海上の王、戦艦よ

來れ幾萬噸の大巡洋艦、

來れ快速なる驅逐艦、

汝の甲は紙のごとくに裂かれむ。

鯨を逐ふ鯨の如く

わが小さき銀の魚、

突如海藻の中よりはひ出づる時

長鯨は忽ちにして屠られん。

荒波騒ぐ死の海原に

硝煙渦巻き、砲聲轟くとき、

われ海底より浮き上りて

魚形水雷は何事かを語らん。

あゝ海上の權威、巨艦巨砲よ、

汝等わが前に幾程の價値ありや？

疾風、怒濤、われそを恐れず、

潜航艇に勝利あれ！

石炭の歌へる

奴等は俺達を地底の楽しい寢床から掘り起した。
そして俺達を焚き、蒸し、乾留しやがった。

奴等は俺達を余すところなく酷使し、利用して
奴等の『文明』と云ふものを送りあげやがった。

奴等は俺達のありとあらゆる成分と

貴い血潮をくすね取りやがった。

奴等の欲しがつてゐる光ミ、熱と、速力と、

なくてはならぬ貴い物質とが俺達から湧いて出るんだミ
さ。

知れたことだ、俺達は長い間の辛棒と苦勞で

やつとこれだけのものに仕上げたんだもの。

たとへそれはダイヤモンドの輝きも

黄金の色澤もないことは云へ。

今俺達はお蔭で衰れた奴隷の身の上にある。

凡て能あるもの、價値あるもの、酷使される世の中だ。

俺達は時々刻々に焚かれ、蒸され、乾餾されつゝ、
憎むべき人間の罪惡を天に訴へてゐるのだ！

だが憐むべし、俺達の命はもう迫つて來た、

俺達は間もなくこの世界から姿を消してしまふだらう。

おゝその時こそ、奴等はその光、熱、速力、

多くの貴い物資を何に求めるだらう？

石 油

黙々として横つてゐる大地の心臓から

汲み出される青暗いどろ／＼した血液！

その貴い血液を人間は今争つて

文明生活の糧にしてゐる。

石油よ、お前は文明の炬火を點する

貴い聖油であり、また國民の血潮だ。

お前の油が盡きたら我々の社會は暗闇となり

我々の國土は敵の爲に蹂躪されてしまふだらう。

黄金を掘り、金剛石を探して騒いだのは過去の夢だ。
新らしい寶物はこの液体だ。

麥があり、米があり、塩があつても

國民にこの營養物がなかつたら亡國だ！

おゝカリホルニアよ、メキシコよ、コーカサスの澤よ、
新らしいエデンはお前の井戸によつて漑がれる。
たゞへ私が百萬の大軍を擁せずとも

お前さへあれば、世界を掌握することが出来るだらう！

坑夫と漁夫

坑夫

俺の働いてゐるところは大地の中だ、
——いつも眞暗な、じめじめとした、息苦しい。——
そこで俺達は俺達のつるばしを振つて
闇黒の底から生活を掘り出すのだ。

漁夫

俺の働いてゐるところは海の上だ。
——いつも輝やかな、廣々とした、氣持のいい。——

そこで俺達の船を泛べて

大海の胸に生命を托してゐるのだ。

坑夫

人は知るまい、俺達の流す汗さ、
苦しい呻きと、痛ましい犠牲さを。
人々は余りに地上の歡樂に酔つてゐる、
俺達の苦勞を知つてゐるのは大地ばかりだ。

漁夫

人は知るまい、俺達の自由さと、
楽しい微笑と、日々のごよこびきを。

人々は余りに地上の生活に勞れてゐる。
俺達の楽しさを知つてゐるのは海ばかりだ。

坑 夫

大地よ、お前は俺達の父だ。俺達はお前の懐から
石炭を、黄金を、多くの金属を掘り出してゐる。
お前は何時も胸を開いて俺達にそれを與へ
お前自身苦しみつゝ俺達を育んでゐてくれる。

漁 夫

海よ、お前は俺達の母だ。俺達はお前の懐に
飽くことを知らぬ欲望をかけてゐる。

お前の量り知らぬ蔵には嘗て欠乏がなく
お前の美しい面はとこしへに若々しい。

坑 夫

俺達は明けても暮れても汗みどろになつて
たゞあくせくとお前の懐ばかり探してゐる、おゝ大いよ
だがやがで俺達にも一切の勘定の日が来るのだ、
その時こそ、おゝ父よ、俺の痛み切つた白骨を温かく抱
いてくれるだらう。

漁 夫

俺達は笑ひ、よろこび、高らかに歌ひつゝ、

来る日、来る日をお前の上で送つてゐる、おゝ愛する海

よ！

やがて俺達の航路に終りの日が来た時、

おゝ母よ、お前の静かな胸の奥の珊瑚の床で眠らせてお

くれ！

—(了)—

殆んど二十年と云ふ長い間、私は只管詩に精進して参りました。その間に私の生活は幾度かの變遷を見ましたが始終變らなかつたのは私の詩作です。この度漸く積年の希望であつた詩集の出版を果して感慨無量のものがあります。

この集は最近十年間の作品の中から撰り集めたものです。第一篇は主として自然を、第二篇は私の生活である工場生活や、近代文明を歌つたものを一束としました。そしてこの両方面の作品を通じて私の詩を窺つて頂けば結構です。

この詩集を出版するに當つて多くの助言と激勵を賜はつた、石丸椿平、富田碎花両先生に感謝いたします。

大正十五年三月

大阪に於て

著者しるす

光と響の交響樂

定價金壹圓

大正十五年三月廿五日印刷
大正十五年四月一日出版

著者 岡田春潮

發行人 兼印刷人 岡田小三郎

大阪市港區南恩賀島町五番地

發行所 青蘆社

大阪市港區南恩賀島町五番地

印刷所 やまと工場

奈良縣山邊郡丹波市町川原城



終

